〈博物館特別展記念講演会講演録〉

聖徳太子信仰と民俗

教授　豊　島　　修
（日本近世庶民生活文化史・日本宗教民俗学）

はじめに

聖徳太子(574～622)は、わが国の歴史上において偉大な政治家にして、仏教の理解と奨励に先駆的功績を遺した人物として知られる。この聖徳太子への「追慕・賛嘆」を母体にして生まれた信仰は、一般に「聖徳太子信仰」(「太子信仰」と略称)といわれるが、それは時代によって必ずしも一様ではない。以下では、「太子信仰と民俗」(この場合、民俗とは日本人の持ち伝えている伝承と慣習の複合体と把握)の関わりを、主に近世信越の山村集落にみえる「黒駒太子信仰」と、陸中地方を中心に分布する「マイリノホトケ(仏)」の信仰習俗を中心に報告することにしたい。

Ⅰ、太子信仰の問題点(1999年前後の研究状況)

古代・中世の太子信仰研究をふまえた追塩千尋氏は、太子信仰研究が個別細分化したことを述べ、次の四点を問題点として指摘した。すなわち①時代ごとに並列的に太子信仰の実態が叙述され、時間的に断絶がみられること。②仏教界のみならず、政治・文学・美術・民俗にみられる太子信仰の相互連関をどのように把握されるのか。③太子信仰を貫く視点は何か。太子を天才・聖者・英雄論者的に論じてよいのかという問い。④何故その時代に太子信仰が高揚したのか、また何故様々な形態としてあらわれたのか、その形態の意味するものは何かなどである(「古代・中世における太子信仰の性格」『史流』14、1973年)。こうした追塩氏の指摘はもっともなことであり、現在の中世太子伝研究を例にとっても、イ、史料的に未翻刻のものが多いこと。ロ、その内容と絵伝の関係、あるいは中世太子信仰との問題を関連させる研究が少ない状況にある。そのため太子信仰の問題と研究視角の重要性が強調される(蒲池勢至「太子信仰」『民衆宗教史叢書』32、雄山閣、1999年)。また上記の問題意識の必要性をふまえる筆者も、日本宗教民俗学研究の立場から、主に①と②に関する問題を検討したことがある(「聖徳太子信仰の発生と展開」『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』1992年)。そこでは時代別の太子信仰の様相を絵画史料との関係で論じたのである。

また太子信仰研究を総合的に整理された蒲池勢至氏は、民衆宗教史研究の立場から、太子信仰の研究成果と課題を丁寧にまとめられた。すなわち「太子信仰の展開と性格」という課題を大別して、イ、四天王寺に対する信仰(平安期以降の四天王寺参詣者と信仰形態、四天王寺念仏、磯長太子廟、浄土信仰と死者追福信仰など)、ロ、真宗と太子信仰、ハ、太子信仰と民俗、ニ、太子信仰と説話・絵解きの四点から、太子信仰の課題を整理している(前掲「太子信仰」)。後述するように、これらの課題はいずれも本報告と関連するが、さらに日本民俗学の太子信仰研究の関心にふれると、「民間における太子信仰」(聖徳太子をまつる信仰）という視点から、⑴建築職人からの信仰、⑵引導仏としての信仰、⑶山・川の民による信仰の３点から、検討することを

述べている（『日本民俗辞典』下、吉川弘文館、2000年）。この場合も、(1)の大工などの職人の太子講の問題のほか、(2)のマイリノホトケを主たる課題とするもの、および(3)の「ワタリ」（渡り）といわれる金堀り・杣工・轆轤師・鋳物師などの職人集団を指す。南北朝・室町期の太子信仰の展開と民衆化については、彼らワタリが真宗弘通の主役であったとするが、先の(2)(3)が本報告と関わる課題であることは、次に述べたいと思う。

Ⅱ、「黒駒太子」信仰と「マイリノホトケ」とは

上記、太子信仰の研究史からも理解されるが、「太子信仰と民俗」を課題にするとき、近世の地域民衆の信仰習俗を窺わせるのは、「黒駒太子」信仰と「マイリノホトケ」である。前者は、聖徳太子の木像とは別に、太子の一生を絵画化された『聖徳太子絵伝』の部分図「太子黒駒登岳図」（延喜十七年（917）成立の『聖徳太子伝略』に載せる、太子27歳のとき、甲斐国から献上された黒駒に乗り、富士山（附神岳）を登ったという伝承を描いた絵画史料）を指す。「絵伝」は、下段に太子が黒駒に騎乗せんとする場面と、中段に黒駒に乗り天を駆ける太子と、その背後から天蓋を差し掛ける調子丸を描き、上段には富士と目される山を飛び越えていく場面を配した図像である。中世以降に生産・再生産された「中世太子伝」のテクスト類は、『聖徳太子伝略』太子二十七歳条を基底として形成される（近年の中世説話研究は、「絵伝」に見える太子を「諸国・諸霊地を巡礼する太子像」と「領地巡見する太子像」に分類して検討している。伊藤潤「太子黒駒飛翔譚の展開―まいりの仏における『黒駒太子異像』の形成―」『伝承文学研究』57、2008年）。しかし絵像の「黒駒太子像」を最古例と特定することは困難である。ただ美術史研究者による「絵伝」の成立は室町期を上限と判断するので（大阪市立美術館監修『聖徳太子信仰の美術』東方出版、1996年）、この説にしたがえば黒駒太子信仰や、次に述べる「マイリノホトケ」の信仰習俗と同様、少なくとも室町中期～後期頃には、絵像と信仰習俗が地域社会に定着していたと見られる（後述）。

他方、「マイリノホトケ」とは、現東北の岩手県から北陸地方、さらに長野県から山梨県にかけて伝承される民俗信仰（およびそれに類似した信仰形態）を指す。旧暦十月の定められた日に、「マイリノホトケ」（まいりの仏）と呼ばれる絵像・彫刻を祀るイエ（本家筋が多い。これは近世後期、信越秋山郷の「黒駒太子絵像」を所持する安部家と同じ）や祠堂へ、一族や近親者が参詣する儀礼形態である。中世後期以降には、死者の枕元に掲げられて浄土への引導の証とされ、「黒駒太子」信仰と同様な信仰習俗が存在していた。また祭祀月から「十月仏」とも呼ばれているが、これは真宗教団の先行形態をしめす道場主＝毛坊主に対して、同族祭祀の形態と推測される。またその本尊は阿弥陀如来・六字名号などの絵像・彫刻が中心であり、その中には少なからず「聖徳太子画像」（黒駒太子像・黒駒太子登岳図と称される画像）の姿が見られる。

太子黒駒登岳図
（大阪市立美術館編『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』より）

司東真雄氏論文「「マイリの仏」源流考」(1974年)の発表後、調査報告書が刊行され(1976年)、総数は絵像・木像をあわせて251例が現存しているという。その内、聖徳太子の絵像は112例で、太子孝養像・黒駒太子像・太子講経像・太子・浄土高僧像・太子一代記像の5様式に大別される。さらに黒駒太子像は、全太子像112例中50例が確認できるという。

こうした調査例をふまえて、太子信仰は地域史研究の側面や、習俗・信仰儀礼の形態に研究の視点があてられるが、他方、個々の図像の読み解きは未だ不十分である。

Ⅲ、近世後期黒駒太子像の図像と信仰習俗

現長野・新潟両県に跨る近世後期の信越秋山郷に生きる山村農民にとって、宗教、すなわち仏や神を媒介にして、人と仏、人と神、人と人の結びつきを強固にしていた。しかもその宗教の中心にあるのは黒駒太子信仰である。文政十一年(1828)の鈴木牧之著『秋山紀行』に、「寺のない時代の秋山の古風」として、「この菩提寺と申すも、まだ百年に届かず」とある。また秋山郷では死者が出ると、「夏、冬共にこの黒駒太子の掛けもので、何れの村方よりも(黒駒太子の画像を)借りにきて」、「これを死者のうえに三遍廻」したという。「古来引導なり」という秋山郷の葬墓習俗の慣例が、これである。この信仰習俗によって死者は往生すると信じられたのである。そして雪が溶ける春になると、菩提寺(越後側の曹洞宗大龍寺か龍源寺)から住職が本葬に来るのである。

そこで黒駒太子の画像とはどのような構図であったかというと、「太子ハ黒き馬に乗って傘をさして天に登る」図柄(『秋山紀行』)と記していた。既述した「マイリノホトケ」の中の黒駒太子像に違わない図様である。また、この絵像の多くは上・中・下の三段で構成されていることは既に述べたが、それは人びとが太子を崇敬し、信仰対象として太子の偉大さ、とくに霊力をもつ太子を説いて唱導説教用に制作され、死者引導に使用されたからである。つまり太子の霊力と黒駒の神秘性、および雲と富士山の宗教性が「絵伝」に加わったのであろう。その始原を推測することは困難であるが、平安後期からあらわれる「雲上弥陀聖衆来迎図」の原型をなすという指摘がある(五来重『善光寺まいり』平凡社、1988年)。また馬が霊魂の乗り物という信仰は、現今の盆行事における藁や胡瓜の精霊馬に残っている。さらに雲も霊魂が天上にのぼるための乗り物であったことは、鎌倉中期頃の文永五年(1268)「造立聖徳太子像」の胎内納入寄進者の「結縁交名帳」(五来重編『元興寺極楽坊 中世庶民信仰資料の研究』法蔵館、1964年所収)に、「太子の恩徳に負ぶせり候いて」とか、「雲のうちの働き者、五人、次郎・法界衆生、平等利益、南無阿弥陀仏……」という文言からも推測される。

(左)聖徳太子考養像・(右)黒駒太子画像
(長野県・栄村教育委員会蔵)

これを要するに、三幅の、図柄の異なる構図がどうして描かれたのかという問題は、中世の人びとの宗教観あるいは民俗性が、黒駒太子の画像にどのように反映されているかという問題でもある。この画像は、中世とくに鎌倉後期から室町期にかけて多く制作されている。それは①当時の人びとが太子に霊力を認める民俗信仰と、②黒駒という馬の神秘性の問題、さらに③雲の問題と富士山が問題と

なる―修験道史研究の立場からは、富士山は聖地化された宗教性をもった霊山と理解される。こうした問題がすべてミックスされて、「絵伝」の部分図が描き出されてくるのではないか。私たちは『聖徳太子絵伝』を見て、制作された当時の社会なり、民衆がもっている宗教観や民俗性まで注意深く観察しなければならない。それは「太子絵伝」ばかりでなく、絵解き唱導を目的に制作された絵画史料の重要性を再認識するためにも、大切な視点である。この絵像が大量に刷られ、それを持参して絵解・唱導した遊行宗教者の山村への定着とその時期を推測せしめる。おそらく室町末期頃に、善光寺系の聖が秋山郷に定着したのであろう。

このような中世のヒジリ宗教者については、高野山の弘法大師信仰と納骨信仰を諸国に広めた「高野聖」のほか、平安後期から中世に霊地四天王寺の信仰を広めた「四天王寺聖」の存在が注意される。というのは多くの理由から、「四天王寺聖」は信濃善光寺の阿弥陀三尊信仰と聖徳太子信仰を広めた「善光寺系聖」と深い関係があるとされる（前掲『善光寺まいり』）。とくに聖徳太子信仰と善光寺如来信仰の密接な関係が重要であり、また太子信仰が何故葬墓習俗に関係があるのかという問題とも関わる。そのうち後者は、古代に太子廟が死者往生の儀礼の聖地であり、『顕真得業口決集』には、天喜二年（1054）九月、磯長廟で忠禅なる誑惑の聖が太子廟の石室に入って「不思議の作法」をしたと記していた。この作法とは宗教民俗学や修験道史研究の成果からいえば、古墳石室内の「逆修作法」と推定される。すなわち古墳内に入れてもらった人は、一旦死んだことにして引導を渡す作法を受ける。それから生まれ代わったことにして、古墳から出る意である。これは「擬死再生儀礼」といわれ、同様な例は善光寺の瑠璃壇下の回壇の暗闇も、最初は、このような「不思議な作法」から始まったのではないかと推定されている（前掲『善光寺まいり』）。これが儀礼化すると、浄土宗や融通念仏宗などで行われる「五重相伝」や「伝法」となる。その功徳によって現世では健康で延命長寿となり、来世には必ず往生できるという庶民信仰である。そうすると『日本書紀』推古天皇二十一年の「太子伝」に見える「片岡山の飢人」伝承も、擬死再生儀礼（生まれ変わり）ではなかったか。ともあれ平安中期以来、聖徳太子は往生信仰の対象となっていたことは十分考えてよいであろう。

翻って中世後期に秋山郷に入って定着した遊行宗教者については、その子孫である阿部家を「如来様の家」といわれ、善光寺如来を安置し、傍らに太子の画像や孝養像などを安置する太子堂の存在と、善光寺講の存在などから、その前身を善光寺系の聖であったと推測してよい。この善光寺系聖がつくったであろう太子堂が、近世には「村の惣道場」となり、秋山郷の農民が亡くなると、夏冬にかかわらず黒駒太子の画軸で死者引導したのである。

おわりに

最後に秋山郷の黒駒太子信仰とマイリノホトケの信仰習俗を比較すると、類似点は寺の無かった時代に、いずれも黒駒太子の画軸が引導仏として信じられていた。他方、相違点としては、マイリノホトケが本家を中心とする同族集団で太子を信仰し、多分に真宗化しているの対し、秋山郷の村人はムラ全体で地域社会の信仰を形成していたことが大きい。歴史的には、本来、同族の信仰集団が先にあり、そこに善光寺系聖の布教により真宗化したと考えられるが、史料の分析から導かれたものではないので、さらに検討が必要である。

ともあれ近世秋山郷や奥羽地域の黒駒太子信仰やマイリノホトケには、死者の滅罪による浄土往生を願った一面を表出していた（豊島修「近世における信越秋山郷の庶民信仰―黒駒太子信仰を中心に―」『大谷学報』53-2、1973年）。そこに民俗宗教の呪術性・民俗性とむすんだ仏教信仰の一端をあらわしている。それこそが近世山村・村落農民の日々の精神生活に即した現実の信仰であったと思われる。